

論文 / 著書情報
Article / Book Information

論題(和文)	知財見聞録 チェンマイのオークションビジネスと首長族村への訪問
Title(English)	
著者(和文)	田中義敏
Authors(English)	Yoshitoshi Tanaka
出典(和文)	発明, Vol. 112, No. 10, pp. 34-35
Citation(English)	THE INVENTION, Vol. 112, No. 10, pp. 34-35
発行日 / Pub. date	2015, 10



知財見聞録

チェンマイのオークションビジネスと首長族村への訪問

東京工業大学 イノベーションマネジメント研究科 教授 田中 義敏

チェンマイの成長ビジネス

去る5月3日から3日間、「タイ王国の京都」といわれるチェンマイを訪問してきた。チェンマイは、「ランナー・タイ王国」（1296年にメンライ王により成立したタイ王朝）の首都であり、タイ北部最大の都市である。

チェンマイは、お堀と城壁に囲まれた古都というイメージがあるが、筆者が最初に訪れたのは、友人が経営するオークションビジネスの会社だった。

ある商品の売り手と買い手が存在し、その売買を成立させるための場を設けるのがオークションビジネスであるが、売買の対象物、売り手への課金、売買価格の決定プロセス、オークションが現実の物理的な場所なのか、ネット上なのか、さらに、商品の希少性や普及レベル、市場ニーズ、ひいては生活習慣や文化的側面によってその様子はさまざまである。

米国では、世界最大のネットオークション企業であるeBayが急成長したが、チェンマイでは、中古の建設機械等の分野で大きな成長を遂げている。

タイ国に限らず、巨大な国土開発・建設市場を持つ新興国では今後さらに成長する可能性を秘めた領域であろう。

筆者の友人は大学卒業後、バンコク市内で成長していたオークション企業で約3年間の経験を積んだ。バンコクから見ると800kmほど北に位置するチェンマイにはいまひとつ手が届きにくく、

北部にはさらなる開発地域が残されていることから、国土開発・建設事業に関わる企業からは安く建設機械を提供するビジネスが求められていた。

彼は、5年前に無一文状態でチェンマイにオークション会社を設立した。親戚からの借金を元手に建設機械を輸入し、自らの手で新品同様のレベルまで修繕するのである。1台目が売れた時の喜びを今でも忘れないという。

彼のビジネスモデルは極めて単純。日本をはじめ、世界中から中古の建設機械を安く購入し、コンテナでチェンマイに輸送。若いエンジニアを使って機械の分解、部品交換、性能試験、外装塗装を施し、使用不能だった中古品に新たな命を吹き込むのである。

海外から輸送されてきた中古の機械が所狭しと工場内に並んでいる。それらを見て、「コレ、まだ使えるの?」と尋ねると、「もちろんです! 使えるようになるまで我々が修繕します!」と彼は自信タップリに言う。

オークションで販売した商品には、いつでも緊急時に無料で対応する保証期間がついている。使用時に新たな故障が生じた場合、どのように対応するかが会社の信頼を構築するうえで重要なのだという。

建設機械等のメーカーは、いずれも世界で名の通った企業であるが、修繕に必要な部品はコピー商品で代用しているのが現状ではないだろうか?

それらがタイ国において特許権で保護されているとは思えない。ボルト、ナット、歯車、ガスケット等、一般化された部品が大半であろう。

また、そもそも市場は純正部品を求めているのか? 現地では貴重な製品供給だが、建設機械というビッグビジネスの全体からみた場合、無視できる範囲なのかもしれない。

輸入規制と世界の自由貿易

筆者は「なぜ、中古車を手掛けないのか?」と無知な質問をしてしまった。

タイ国は、海外からの中古車の輸入を許可制にしている。すなわち、国内産業の保護育成と環境汚染抑制の観点から、中古車を「輸入許可取得必要品目」（全19品目）の一つに指定しており、規格基準への適合や関税等、厳しい輸入条件が課せられている。

さらに、輸入許可の条件は主に個人用、政府関係、再輸出目的に限られており、中古車ビジネスとしての輸入は事実上不可能になっているということである。

彼の説明を聞き、世界的規模で議論が進む自由貿易の仕組みがビジネスに与える影響の大きさを痛感した。

古都チェンマイには似つかわしくない訪問先だったかもしれないが、わずか5年で立派な工場と保管倉庫を持つ会社へと成長させた、彼の実業家としての志に触れることができた。

北部で最古の寺院

せっかくチェンマイまで来たのだから、古都の雰囲気も味わおうと友人の会社の近くにある寺院に連れて行ってもらった。Wat Chamthewiである。

同寺院建造の歴史は西暦749年にまでさかのぼるという。タイ北部では最も古く、ピラミッドと同じように四角錐からなる石造仏塔であり、4面には古代仏陀をイメージした彫刻が施され、内部には、Phra Nang Cham Thewiの遺骨が埋葬されているとのこと。

首長族の村を訪問

チェンマイ訪問の最後は、タイ国では首長族（Long neck or Padong）で有名なカレン族との面会であった。彼らと直接触れ合えるというバーン・トン・ルアン村（Baan Tong Luang Eco-Agricultural Village）を訪れた。

そこは、山岳民族の文化保護や生活保護を主な目的として2005年に観光地化されたのだという。

カレン族は隣国のミャンマーに住んでいた部族であるが、後に国境を越え、チェンマイの山岳地帯に農作業者として移住してきた。その後、2005年になってチェンマイの労働局から外国人労働許可書（Alien Labor Card）が発行され、ミャンマー国籍の総勢16名が、バーン・トン・ルアン村に移住する。

カレン族はタイとミャンマーを合わせて推計約3万人とされているが、その一部の人たちがタイ政府に保護されるように暮らしているといっている。

カレン族のなかには首長族と呼ばれる女性たちがおり、5歳くらいから金のリングを首にはめて生活するという。カレン族にとってリングの数が多いほど美人とされているようだ。

何人もの首長族の女性とお会いしたが、皆さんとてもかわいらしい。時折、チャーミングな笑顔を見せてくれた。

伝統的知識の保護

カレン族の人々は、もともとビルマ（現ミャンマー）から戦火を逃れてきた難民だが、現在、そのミャンマーにおける改革開放の進展に世界中の視線が集まっている。

今後、カレン族が現在の不安定な生活から脱し、自由社会へと飛び出していくには多くの困難を伴うことも予想されるが、筆者は心から応援したい。

知的財産の世界でいうと、現状では十分に保護されていない伝統的知識の保護の問題が関係してくるかもしれない。カレン族が長年にわたって築き上げてきた知的資産にも目を向けるべき時がきているといえよう。



筆者の友人であるGIFT社長



修繕を待つフォークリフト等



こんな物でも使えるように修繕してしまう！



バーン・トン・ルアン村への道しるべ



バーン・トン・ルアン村で会った美少女



本当に首が長い